

# ガラス文化とまちづくりの融合

「黒壁ガラス館」が誕生して、今年で30年。

かつて日曜日の午後にもかわらわらず、1時間にも4人と犬1匹しか通らなかつたまちは、年間約200万人もの来街者でにぎわう観光スポットとして生まれ変わった。

今号では、株式会社黒壁の高橋政之社長とともに黒壁の30年を振り返る。

## 「黒壁銀行」の保存と中心市街地の活性化

昭和62年、黒漆喰で塗られた外壁から「黒壁銀行」の愛称で親しまれてきた、旧第百三十国立銀行長浜支店の建物が売りに出され、取り壊されようとしていた。明治期の貴重な建造物で、まちのシンボルでもある黒壁銀行を保存し、利用しようと翌年4月、第3セクター株式会社黒壁（以下黒壁）が設立される。ここから長浜のまちの再生が始まった。

当時、モーターゼーションの発達や、郊外型大型店舗の進出によって、中心市街地は疲弊していた。「ひと4人と犬1匹」とは昭和63年のことである。

黒壁は銀行の建物を拠点に事業展開し、まちの活性化に取り組んでいくのだが、高橋社長によれば、長浜のまちづくりには「ながはま21市民会議」の存在も大きいという。



株式会社黒壁代表取締役 高橋 政之さん  
「30周年の記念事業は、みんなで行って楽しんでお祝いしてもらいたい」

## ガラス文化の追及と事業化でまちおこし

「黒壁を立ち上げたとき、実は事業内容や事業計画など何も決まっ

ていませんでした。銀行の建物が潰される前に、とにかく買い取る

ことが急務だったのです。活用について議論を交わしていくなか、初代社長の長谷（定雄）さんがガラスにしよう、と」  
現在では「ガラスのまち」として知られる長浜だが、もともとはガラスと縁もゆかりもなかった。そのゼロからのスタートが、自由な発想で長浜独自のガラス文化を創造していくことに繋がったと高橋社長は話す。

「歴史性」「文化芸術性」「国際性」という黒壁の事業コンセプトや、江戸から明治の面影を残す長浜の古いまちなみが、図らずもガラスと調和し、融合したのだ。黒壁銀行を整備した「黒壁ガラス館」をはじめ、古建築を活用してガラス工房、ギャラリー、美術館などを次々に開き、ガラスに特化したまちづくりを進めていく。

当初は観光をあまり意識していなかったという。市民を再び呼び込めるように、子どもが楽しめる場所がありませんでしたので、家族で訪れてもらえるようになりまし

込んで、商店街のにぎわい復活を目指していたそうだが、本物のガラス文化を地域に根付かせる取り組みは訪れたひとたちに好評で、それが口コミなどで広がり、観光客は年々増え続けていった。

## 黒壁ガラス館を核に新たな商業地が形成

北国街道の空き店舗や空き地を順次、借り上げるなどして事業を拡大。30を超える黒壁関連のグループ店舗（直営10店舗）を総称して、「黒壁スクエア」と呼ぶ。周囲には黒壁に触発された新規出店の店舗も少なくなく、黒壁ガラス館を中心とする区域全体を、黒壁スクエアと認識している観光客も多い。

100軒以上の空き店舗が再生され、新陳代謝を繰り返しながら、かつてのシャッター街は、人気の



昭和29年に撮影された黒壁の建物。当時は長浜カトリック教会だった



地ビールや世界のビール、特製フードを味わえるほか、限定の制作体験も楽しめる黒壁ビアフェスタ



株式会社黒壁 広報・デザイン課課長 田中 仁さん  
「30周年記念事業は学校の芸術祭みたいなもの。ガラスを通じて、いろんな繋がりを目指していきたい」

「営業力の強化（多角的な営業展開）、コト事業（体験教室など）の開発・拡充、インバウンド対策など、課題も少なくありません。30年前、私たちが黒壁を立ち上げたときの年代にある今の若手が、これからのまちづくりを牽引し、続けていってほしい」と高橋社長は若い世代に期待を寄せる。

「それまで子どもが楽しめる場所がありませんでしたので、家族で訪れてもらえるようになりまし

## ■黒壁ガラス館（黒壁1号館）

「黒壁ガラス館」は黒壁を象徴する店舗。建物は国の有形文化財に登録されている。ヨーロッパを中心とした海外の伝統的なガラス製品をはじめ、アクセサリーやステーションナリーなどの小物類からインテリアまで、さまざまな製品約3万点が並ぶ。季節の商品も取りそろえており、夏は風鈴や浮き玉が人気という。中川さんは入社2年目に同館へ異動となって以後、販売スタッフを6年間務めてきた。「お客様のいい思い出になるような接客を心掛けています」と話す。1年ほど前からは、2階にスペースを設けてワークショップを開催。気軽にガラスの作品づくりを楽しめると同時に、旅行の記念になると好評だ。



スタッフの中川梨紗さん



初夏のガラスジュエリーフェアを開催中。写真は夏の涼やかな柄の着物に合わせたい、ガラスの帯留め

## ■ステンドグラス館（黒壁11号館）

「ステンドグラス館」は、長浜駅など市内の公共施設を飾るステンドグラスのすべてを制作している。同館ではステンドグラスの体験教室も開いており、観光客だけでなく、手作りのプレゼントを贈りたいと、地元への参加者も多い。講師を務める岸本さんは学生時代に研修旅行で長浜を訪れ、同館に置かれていたステンドグラスを見て、「ステンドで、こんなすごいものが作れるんだ」と衝撃を受けたと話す。ステンドグラスの勉強を続けるなら、ぜひここで、と昨年就職した。「教室ではものを作る楽しさ、ガラスの良さを伝えていきたいいな」と。そのためにも、自分の技術を磨くことにも頑張りたいですね。



スタッフの岸本望さん



岸本さんが制作したランプシェード。色とりどりの板ガラスに、蝶々のアクセントが可愛い

## ■黒壁ガラススタジオ（黒壁2号館）

吹きガラスとエングレーヴィングの工房を構える「黒壁ガラススタジオ」。所属作家の手になるオリジナルガラスを展示販売している。神崎さんは大学でガラスを専攻し、吹きガラスに出会う。卒業後、黒壁に入社して6年目を迎えた。吹きガラス制作の取り組みに、曳山の上で演じられる子ども歌舞伎のひとコマをガラスで表現した「曳山まつりガラス人形」がある。「そんな地域とのコラボや、ガラスと他の素材を組み合わせた作品など、いろいろ挑戦していきたい」と意欲をみせる。30周年記念事業として、デザインコンペを企画。子どもが描いた画をガラスにするもので、どんなデザインが来るか楽しみという。



吹きガラス作家の 神崎美沙さん



最新作のどっぴりとぐい飲み。柔らかな曲線のフォルムに、ほんのり映える青緑の色が美しい作品

## ■96CAFÉ（黒壁18号館）

黒壁ガラス館の向かいにある人気カフェ「96CAFÉ」。平成7年のオープンで、18年に現在地に移転し、4年前に旧店名「カフェ・バクト」から改めた。チョコレートベースに食用の竹炭を入れた、黒いソフトクリームがインスタグラムなどで話題だ。季節ごとに新メニューを考案し、飽きさせない工夫も凝らす。店名にちなみ、9種類のドリンクと6種類のスイーツのみを提供していたが、新たに食事メニューを出すようになり、ランチ目当てのお客も増えた。「地元の方にも愛されるお店になりたい」と中嶋さん。30周年記念事業の一環として、7月1日から琵琶湖をテーマにした青いメニューを提供する。



店長の中嶋幸月さん



青いごはんに、黒いルーのカレー。青の色合いはハーブティー（パタフライビー）を使用している

